

I 報告概要

浜口報告「空間経済学の最前線」は、空間経済学に関する基本的な概念を中心に、現状、問題意識、キーワード（輸送費、規模の経済、ハブ、Labor-pooling、知識のスピルオーバー）、新しい経済地理学、実証研究、批判とインプリケーションについて論じた。とりわけ、市場ポテンシャルの概念と計算式を用いて、実証研究の方法論、既存研究、中国を対象にした既存研究を紹介し、参加者にとっては示唆に富んだ報告内容であった。

丸川報告「温州・陽江における産業集積の発生と発展：マーシャル産業集積理論の限界」は、特異な産業発展がみられる代表的な地域である温州、集積の発展が目覚ましい広東省・陽江をケーススタディとして、文献資料とインタビュー調査の結果を用いて、外部経済だけあって内部経済のない企業には競争力はなく、内部経済が豊富な企業を生み出すことのできない産業集積は環境の変化に直面して容易に崩壊するという、マーシャル理論の限界を論じた。

日置報告「中国江蘇省の産業集積の同定」は、既存研究では不十分な産業集積の同定について、空間的自己相関関係を考慮して江蘇省の郷鎮レベルの空間データを用いて行った。分析の結果、産業の地理的集中度を測定する際には、空間的自己相関に関する情報を補足することが、産業集積などの分析では重要であることを示した。また、省内の有力な産業集積はおおむね検出できたものの、産業発展が遅れた地域の相対的に未成熟な集積は、本分析の方法では特定できない例も存在した。

橋口報告「小地域データと GIS を使った実証分析の手法とその応用について」は、空間データ分析の方法と、統計ソフトや GIS といった分析ツールの発展について、具体例を挙げながら、基礎的な概念を中心に簡潔で的を射た説明を行った。

II 参加者との質疑応答

丸川報告に対しては、多様な産業集積が誕生した理由は販路が重複したこと、産業集積の消滅の理由は外部的要因ではないかといった質問がなされ、報告者は質問者の意見に同意しつつ、内部競争の弊害が増加するという分析結果を再度強調していた。また東京都大田区のように地価の高い場所に集積する例は中国にはみられないことも付言していた。

日置報告については、具体的にどのようなデータを購入し、使用し、その信頼性などの問題点を問う質問が続き、報告者自身もデータに対する疑問を表明し、参加者同士で有意義な意見の交換が行われた。

橋口報告については、回帰分析との違い、ランダムサンプリングで得られたデータも事後的に空間的自己相関をコントロールする必要があることなど、空間計量経済学に対する基本的な質問がなされ、参加者の理解がよりいっそう進んだ。

また三人の中国人研究者からは、浙江省海寧市の産業集積や、統計資料の状況が紹介された。

文責 星野真（神戸大学大学院経済学研究科博士後期課程）